『今 月 の 天 候 と 農 作 業』

通巻第５５９５号
９ 月 号
平成２８年９月１日発行
宮　　崎　　県
宮 崎 地 方 気 象 台

【　特に注意を要する事項　】

期間の前半は、気温がかなり高くなる可能性があります。

【　予報のポイント　】

暖かい空気に覆われやす、向こう１か月の気温は高い見込みです。期間の前半はかなり高くなる可能性があります。・気圧の谷や湿った気流の影響で、向こう 1 か月の降水量は多い見込みです。

【　確　　率（%)】

要素	予報対象地域	低い（少ない）	平年並	高い（多い）
気温	九州南部	10	30	60
降水量	九州南部	20	40	40
日照時間	九州南部	30	40	30

【　予想される向こう１か月の天候　】

向こう１か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。

向こう１か月の平均気温は、高い確率６０％です。降水量は、多い確率５０％です。日照時間は、平年並または少ない確率ともに４０％です。

週別の気温は、１週目は、高い確率６０％です。２週目は、高い確率６０％です。３～４週目は、高い確率５０％です。

<1 週目の予報>　９月３日（土）～　９月９日（金）

台風第１２号や湿った気流の影響で雲が広がりやすく、期間のはじめは雨の降る日があるでしょう。

※明日から1週間の、費別の天気や気温などは、

週間天気予報（http://www.jma.go.jp/jp/week/）を参照してください。

<2 週目の予報>　９月１０日（土）～　９月１６日（金）

低気圧や南からの湿った気流の影響で、平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。

<3 週目から 4 週目の予報>　９月１７日（土）～　９月３０日（金）

平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

普通作物

◆普通期水稲

１　病害虫防除

「穂いもち」の防除は出穂前と穂揃期頃に必ず行います。「葉いもち」が多かったほ場や葉色が濃いほ場は特に注意が必要です。「カメムシ」は穂揃期とその７～１０日後の２回防除が基本です。「トビイロウンカ」は、ほ場毎に株元をよく観察しましょう。

２　水管理

根の活力を維持し登熟を良くするため、収穫の５日前まで間断かん水を続けます。この間は落水時でも土が乾くことがないよう湿潤状態を保ちます。台風時は深水で倒伏軽減を図り、台風通過後も吹き返しの高温・乾燥風により品質低下が起こる場合があるので、風が止むまでは水を保ちます。倒伏した場合に、籾が水面に接すると発芽しやすいので、穂先を隣の株の上に乗せるなどの対応をしましょう。

３　収穫

早いところでは中旬頃から収穫作業となります。収穫適期は籾全体の８割程度が黄化した頃です。乾燥調製は、高温での急激な乾燥にならないように注意し、仕上げの玄米水分は１４．６～１５．０％となるようにします。

◆大豆

湿害防止のため、ほ場周辺や畦間の排水溝を整備しましょう。開花期以降は「紫斑病」や「カメムシ」の防除を行います。「ハスモンヨトウ」は老齢幼虫になると薬剤の防除効果も劣るので、観察に努め、早めに防除を行いましょう。特に孵化後、間もない幼虫が食害した際に発生する白く透けた葉を見つけたら、幼虫が周囲に広がる前に摘み取り処分することも効果的です。

◆そば

そばは湿害に弱く、長時間帯水や冠水すると生育不良や立枯れが発生するので、排水溝を設け生育期間中も排水を徹底しましょう。

(荒砂　英人)

施設野菜

◆共通事項

施設野菜ではきゅうりを始め、ピーマン、トマト、いちごなどの定植が始まります。育苗期の後半は、鉢ずらしを行い、がっちりした苗に仕上げましょう。鉢ずらし後は乾燥しやすいので、かん水不足に注意します。

また、これらの苗は適期に定植することが重要です。台風や降雨の多い時期となるため、ハウスの定植準備は余裕をもって計画的に行います。

かん水管理については、定植の５～７日前にかん水チューブ等を利用し、畦全体が湿るように十分行います。定植直後は活着を促進するため株元を中心に丁寧にかん水します。なお、定植前のかん水量が不足していると根張りが不十分となり生育や収量に大きく影響しますので、特に中期展張ハウス等、１年を通して天井ビニルが被覆されているほ場では注意が必要となります。

◆きゅうり

ハウス抑制栽培の定植期となります。定植後から収穫開始期までの管理が草姿に影響します。根を十分に張らせ、コンパクトな草姿に仕上げることが、収量・品質向上につながりますので、定植後は株元中心の手かん水を行い、活着後はかん水を控えて徒長しないよう草勢の調節を行いましょう。また、定植の早いものは、主枝の摘心期となりますが、摘心を行う１週間前には１回目の追肥を行い、初期の草勢維持を図ります。

◆ピーマン

接木栽培のピーマンは、自根栽培に比べて草勢がやや弱くなる傾向がありますので、通常（１２㎝ポット苗）よりも２週間程度早めに定植を行います。かん水についても定植後から収穫開始時期までかん水量を３～４割増やすなど草勢を強めに保つことが必要となります。

◆トマト

促成栽培の大玉トマト、ミニトマトの定植期となりますが、セル苗を２次育苗せず直接定植するダイレクトセル苗定植が増えてきています。異常茎（メガネ）の発生を抑制するために、定植後にかん水量を制限する管理が行われていますが、極端な水切りは初期生育に悪影響を及ぼしますので、少なめのかん水量で回数を多く施用するようにしましょう。

◆いちご

「さがほのか」は、花芽分化に対する窒素濃度や苗齢の影響等が少なく、花芽分化が揃って早いのが特徴です。

ポット苗の花芽分化期は９月１０日頃ですので、その２～３日前から検鏡を行います。花芽が分化していることを確認して、９月中旬以降に定植しましょう。

なお、定植は採苗が早く育苗期間の長い苗から順番に行い、炭そ病等の恐れのある苗は除去します。

（黒木　正晶）

葉茎菜類及びいも類

９月はキャベツ、はくさいの定植やほうれんそう、だいこん、水田ごぼう、にんじんなどの播種期となります。水はけの良い、地力の高いほ場を選び、植え付け時に適度なかん水を行い、初期生育を促すことが重要です。

生育初期はネキリムシ等の被害を受けやすく、蝶目害虫や甲虫類の食害、雑草の発生も多いので防除・雑草対策が重要です。

◆にんじん

８月播種したものは間引きの時期を迎えます。株間は８㎝程度を目安にし、年内出荷はやや広めに、年明け出荷はやや狭くして有効株数を確保し、収量アップを図ります。干ばつによる発芽不良や大雨による土壌や種子の流失で欠株が多い場合は、まき直しを行います。地域によりやや差はありますが遅くても９月２０日頃までが播種期の限界となります。

◆ほうれんそう

加工用のほうれんそうは下旬より播種適期となります。大柄に生育させるためには、排水の良い、肥沃なほ場を選定します。土壌酸度は石灰資材を施用してｐＨ７を目標に調整します。播種後除草剤を処理しますが、土壌が乾燥しすぎると除草剤の効果が劣りますので、播種前に適度なかん水を行い、適湿の状態で除草剤を散布します。

◆食用かんしょ

普通堀りの収穫期です。生育日数が１３０日以上になると、いもの形や皮色が悪くなります。チョウ目（ハスモンヨトウ、ナカジロシタバ等）が多発しやすいので、若齢幼虫期を逃さず農薬防除を行います。

◆さといもの疫病対策（次作）

今年の疫病の初発には、残さ処理の不徹底によると思われる事例がありました。収穫が終わったさといもの畑の片付けでは、残さの分解を進めるため、トラクタ速度を低く、ロータリー回転を高くし、できるだけ細かく破砕をします。また、残さを畑付近の空き地に放棄することは決してしないでください。

（杉村　幸代）

果　樹

１　常緑果樹

◆温州みかん

極早生温州みかんの収穫が始まります。収穫は、樹上選果を行いながら、着色や果汁成分など、地域の基準に基づいた出荷を行いましょう。

収穫が早い園では、秋期の高温の影響で、収穫後に秋枝が発生し、翌年の着花に悪影響を及ぼすことがあります。９月中旬までに収穫を終える園地では、１０月以降、秋枝が発芽しなくなった時点でマルチの除去やかん水などを実施しましょう。

◆完熟きんかん

今年は６月下旬から７月の花が結実している園が多く、地域やハウスによってばらつきが見られます。良好な初期肥大を確保するため、９月末までに摘果を終了しましょう。

結実が遅く果実肥大が遅れている園や、夜温が早く低下する中山間地域では、９月下旬から１０月上旬にビニル被覆を行い、昼間の高温管理と夜間の加温（外気温よりも３度程度高い温度）により、肥大を確保しましょう。

◆マンゴー

今年は収穫の遅れや日照不足により、剪定後の生育が遅れています。枝の緑化の遅れは、花芽分化や収量に悪影響を及ぼします。葉面散布で早期緑化を図りましょう。剪定の遅れた園では、剪定直後から夜間の加温や早朝及び夕方の保温を行い、新梢の発生、緑化を促進しましょう

９月になると、日射量は真夏よりも大幅に少なくなります。内カーテンや遮光カーテンを開放し、十分な日照を確保しましょう。

２　落葉果樹

◆くり

ほとんどの品種が収穫時期を迎えます。

収穫・出荷に当たっては、早朝に収穫することで、品温を低く保ち鮮度保持を図りましょう。また、家庭選別を徹底し、実炭そ病や果実害虫の被害果の混入を防止しましょう。

（山口　和典）

花　き

◆秋ギク

「神馬６６―４」の１０月出荷作型の再電照は総苞りん片形成後期から４日間実施します。目安として消灯後１２～１４日後ですが、地域や当年の気候で花芽発達のスピードに変動がありますので、地域の農業改良普及センターまたはＪＡにおいて「花芽分化の検鏡」を必ず行った上で実施してください。

直挿しする穂は、低温伸長性を高め、節間伸長や生育の揃いを良くするために２～４℃で穂冷蔵を行います。「神馬」系統は穂冷蔵を長期間実施すると、直挿し後の腐敗が多発したり、開花遅延が発生しますので、冷蔵期間は３週間程度にしましょう。

また、高温に遭遇したキクの穂を使用する年末出荷作型については、電照期間中の低温遭遇によって開花遅延（ロゼット化）を起こす場合があります。今年は特に夏季が高温傾向でしたので、年末出荷作型においては栄養生長期間中に低温に遭遇しないように気温の確保に努めましょう。

◆スイートピー

冷蔵が終了した種子は、活着不良を避けるために遅くとも出庫後３日までには植え付けましょう。また植え付けから１週間は、乾燥しないように綿密な水管理を行い、その後は徐々にかん水間隔を広げて根の張りを良くして下さい。１ヶ月程度は、ベッド全体が十分湿るようなかん水を行って下さい。

植え付け時期の遮光は植え付け前から実施し、植え付け後７～１０日は寒冷紗で終日遮光し、その後は天候に応じた遮光を行って下さい。長期の遮光は軟弱徒長となりますので、生育を見ながら除去します。

◆デルフィニウム

沿海地域の年内出荷作型の定植期になります。早期抽だいを防ぐために定植前に寒冷紗等で遮光するとともに十分にかん水を行って下さい。

中山間地域で８月上・中旬に定植した作型では抽だいから発蕾時期になります。抽だい後２週間程度までは硝酸カルシウム等の液肥を定期的に施用し、株の充実と茎の硬化を図りましょう。

◆キイチゴ

気温の低下とともに腋芽や新しい枝の伸長が盛んになります。また、ハスモンヨトウ等のチョウ目害虫の発生が増えますので、フェロモン剤の利用や定期的な防除を行い、品質を高め、安定的な出荷を目指しましょう。

また、この時期に立っている枝はすべて収穫せず、一部は来年度に向けた株養成のための枝として必ず残します。

◆ホオズキ

白絹病やその他の立ち枯れ病、ウイルスが発生したほ場では、出来る限り残渣を外に持ち出して焼却し、ほ場に残った細かな残渣については、残渣分解資材を散布し、気温が高いうちに耕うんの繰り返しと適湿な土壌水分管理で十分に腐熟させましょう。

（中村　広）

畜　産

◆家畜

今月は夏から秋に変わる季節の変わり目で、気温の日較差が大きくなる時期です。また、台風の襲来も予想されるため、十分な対策が必要となります。さらに、暑熱の影響による受胎成績の低下もこの時期に発生することから、暑さで体力の落ちた家畜の回復を図るようにしましょう。昼は畜舎への風通しを良くするとともに、換気扇や細霧装置を動かし、暑さ対策を行いますが、夜間は急に気温が低下するので、気温差で家畜が体調を崩さないように、温度管理に十分、注意しましょう。

乳牛に関しては、ヒートストレスメーターの温湿度指数（ＴＨＩ）を毎日チェックし、ＴＨＩ値が６７以上の場合は、牛舎ファンを常に稼働させ、牛体に風が当たるよう暑熱対策をしっかり行います。夜間はＴＨＩ値をチェックしながら対策を行いましょう。

豚では、夏期の暑熱による受胎率の低下が見られる時期になりますので、交配期の豚の体調管理と観察を徹底し、受胎成績の改善を図りましょう。また、気温の日較差が大きい季節は、豚や鶏の病気が発生しやすい時期ですので、観察を徹底して疾病の早期発見に努め、早めの対策を行いましょう。

飼養管理の重要事項として、飲水の再点検を行いましょう。特に水道水を利用していない農場では、水質がすぐに悪化し、疾病発生の一因となりますので、こまめな給水器の清掃に心がけ、新鮮な水が飲めるようにしましょう。

◆飼料作物

牛の粗飼料では台風の襲来が危惧されますが、天候に応じた収穫作業を行い、良質粗飼料の確保に努めましょう。また、年内収穫のエンバクの作付け時期にもなりますので、計画的な作付け作業を行いましょう。

（三角　久志）

工芸作物

◆茶

これからの作業は、翌年の一番茶収量や品質の確保に大変重要となります。こまめに茶園を巡回し、適切な管理に努めましょう。

１　秋肥の施用と土づくり

秋肥の施用時期が遅れると耐寒性が低下し、秋冬期の急激な低温により寒害（幹割れ・越冬芽の凍害等）を受けやすくなります。必ず、９月上旬までには秋肥を施用しましょう。また、土壌が固く根量が少ない茶園では、９月上旬までに１０ａ当たり堆肥１～２トンを施用し軽く耕耘を行いましょう。更に、今年、中切り更新した茶園を除き、計画的な深耕を行うと、発根が促進され肥効率向上にもつながります。

２　病害虫の防除

秋芽が硬化していない茶園では、連続した降雨等により葉の濡れ時間が長くなると炭そ病やもち病が多発します。一葉期頃に予防効果の高い薬剤を、三葉期頃に治療効果の高い薬剤を散布します。網もち病の多発が予想される際は、四～五葉期に治療効果のある薬剤を追加散布します。

秋期に多発するチャノミドリヒメヨコバイやチャノキイロアザミウマ、カンザワハダニ等の吸汁性害虫やハマキムシ類も茶園をよく観察し適期防除に努めましょう。

県内の茶園では、チャトゲコナジラミの発生が徐々に拡大しています。この害虫は、成虫が茶園を飛び回りますので、茶園を注意深く観察しましょう。なお、本虫に対する問い合わせや、見慣れない虫を発見した場合には、地域の農業改良普及センター等へ連絡してください。

（黒木　清人）

◆しいたけ

１　原基(げんき)づくり

９月から１０月は、しいたけのもととなる原基の形成が盛んな時期で、今後のしいたけ発生量に大きく影響します。原基は２０℃前後で最もよくできます。

原基の形成促進のため、十分な散水とほだ倒しを行います。原基固定期間（中低温菌：９月下旬～）は、ほた木の移動、天地返し、古ほだ整理を行わず、天地返しは９月中旬までに終了してください。

２　ほだ場の準備

秋以降のほだ起こしに備えて、ほだ場の選定と整理が必要です。ほだ場には、南～東南斜面（暖かい方向）、排水が良く適度の湿度が確保できるところ、日光が差し込む林内、散水施設のための水源があるところが適しています。スギやヒノキ林のほだ場では、間伐や枝打ちを行い、光や降雨の入りやすい環境にしましょう。

（永野　学）

◆たばこ

今月の作業は、通常期販売に向けての出荷規格の確認と来年作に向けた準備が主な作業となります。

1　出荷前には必ず最終確認として、異物・異臭・水分の確認と土砂付着や腐れ等の手入不足がないか、出荷包の確認を行いましょう。あわせて販売見込票を作成してください。
また、普通系に色損系（グレー葉・汚れ葉等）が混入していないかの確認も行い、混入している場合は、ピッキングを行いましょう。
貯蔵害虫については、成虫や食害痕、排泄物がないか確認を行いましょう。発生を確認した場合は、速やかに耕作組合へ連絡し、適切な処置を行って下さい。
確認作業は、晴天日に行い、吸湿による品質低下に注意しましょう。

2　良質堆肥１０ａ当１２００kg以上の使用へ向けて、堆肥の材料を十分に確保しましょう。また、未熟堆肥投入を避けるためにも定期的に切返しを行い、腐熟促進を図りましょう。

3　病害の耕種的防除の徹底を図る為にも夏期深耕を３回以上行い立枯病等、土壌中の病原菌密度低減や土作りに努めましょう。
また、土壌改良や肥料設計の参考にするために、土壌検定を行いましょう

（宮崎県たばこ耕作組合）

内容の詳細について

９月の天候と農作業の詳細内容について。執筆は県農業経営支援課及び森林経営課、宮崎県たばこ耕作組合が担当しています。各作物の病害虫の防除対策、気象災害の事前事後対策等の詳細は最寄りの支庁・農林振興局（農業改良普及センター）へ。

☆「今月の天候と農作業」はホームページにも掲載しています。
（http://nougyoukishou.pref.miyazaki.lg.jp）

向こう１カ月間における農作物の主な病害虫の発生量と防除対策

農作物名	病害虫名	発生量	発　生　状　況　と　防　除　対　策
普通期水稲	穂いもち ※※ 紋枯病	**やや多** 並	葉いもちの発生状況は、発生面積率・程度ともに平年よりやや多く、8/3に注意報を発表しています。 穂ばらみ期以降は稲体の抵抗性が弱まり、紋枯病が上位葉鞘へ進展しやすいので、発生程度の高いほ場は注意が必要です。
	ﾄﾋﾞｲﾛｳﾝｶ（秋ｳﾝｶ） 斑点米ｶﾒﾑｼ類	やや少 並	現時点ではﾄﾋﾞｲﾛｳﾝｶの生息数は少ないものの、今後の天候次第では増殖率が高まることが予想されるため定期的にほ場を観察するなどし、現在低密度のほ場でも注意します。 斑点米ｶﾒﾑｼ類は、穂揃期とその7～10日後の2回防除が基本です。残存虫が多い場合は収穫前使用日数等に注意して追加防除します。
大豆及び野菜類	ﾊｽﾓﾝﾖﾄｳ等ﾁｮｳ目（鱗翅目）害虫	**やや多**	中齢以降の幼虫に対しては薬剤が効きにくくなりますので、早期発見に努め若齢幼虫期に防除します。施設栽培では施設開口部に防虫ﾈｯﾄを設置し、成虫の飛来を防止します。
施設果菜類	ｳｲﾙｽ媒介虫（ｱﾌﾞﾗﾑｼ類、ｱｻﾞﾐｳﾏ類等）	－	ｳｲﾙｽ病は生育初期に感染すると大きな被害をもたらします。ｱﾌﾞﾗﾑｼ類やｱｻﾞﾐｳﾏ類などは種々のｳｲﾙｽ病を媒介しますので、施設開口部への防虫ﾈｯﾄ設置や定植時の粒剤施用などの防除を徹底します。
	ﾀﾊﾞｺｺﾅｼﾞﾗﾐ類	－	県内ほぼ全域で、各種薬剤に対して感受性の低い（薬剤の効きにくい）ﾊﾞｲｵﾀｲﾌﾟQが、優先して発生していることが確認されています。薬剤のみでは防除が困難ですので、防虫ﾈｯﾄや粘着板等を組み合わせた総合的な防除対策に努めます。
	ｷｭｳﾘ黄化えそ病（MYSV）	－	ﾐﾅﾐｷｲﾛｱｻﾞﾐｳﾏによって媒介されるキュウリ黄化えそ病(MYSV)の発生が拡大していることから注意が必要です。
促成いちご	炭疽病　※	－	罹病苗の持ち込みは、本ぽ内での感染源となるため健全苗のみ定植します。苗床で発病した苗に隣接している苗(半径3ポット程度)は、感染苗と見なし廃棄します。苗からの持ち込みによる病害の発生が見られるので、定植前に防除を徹底します。
果樹全般	果樹カメムシ類	－	本年はﾌｪﾛﾓﾝﾄﾗｯﾌﾟおよび予察灯調査におけるﾁｬﾊﾞﾈｱｵｶﾒﾑｼ・ﾂﾔｱｵｶﾒﾑｼの誘殺数は平年に比べ少なく推移しています。 温州みかんでは、着色期の加害は落果を生じやすいので、園内外を見回り、早期発見・早期防除に努めます。
カンキツ類（露地栽培）	かいよう病 黒点病　※※	やや少 並	かいよう病は、台風等による枝葉の損傷等により発病が助長されます。薬剤は、事後より事前に予防的に散布する方が効果的です。 黒点病の発生が多くなっており6/24に注意報を発表しています。降水量が少なくても１ヶ月毎の防除を実施します。
	ﾐｶﾝﾊﾀﾞﾆ ﾁｬﾉｷｲﾛｱｻﾞﾐｳﾏ	やや少 並	ﾐｶﾝﾊﾀﾞﾆは、平年並の発生です。寄生葉率30％または1葉あたり虫数0.5～1頭の発生初期に防除を行います。
茶	炭疽病 もち病 輪斑病	並 並 やや少	炭疽病は、秋芽の生育期に降雨が続く場合には、生育初期から7日間隔で2～3回防除します。もち病は、中山間地での発生を確認しています。 輪斑病は新梢枯死症の原因となりますので、輪斑病の多発ほ場では秋芽の萌芽期～２葉期に防除を行います。
	ｶﾝｻﾞﾜﾊﾀﾞﾆ ﾁｬﾉｺｶｸﾓﾝﾊﾏｷ ﾁｬﾊﾏｷ ﾁｬﾉﾎｿｶﾞ ﾁｬﾉｷｲﾛｱｻﾞﾐｳﾏ ﾁｬﾉﾐﾄﾞﾘﾋﾒﾖｺﾊﾞｲ ｸﾜｼﾛｶｲｶﾞﾗﾑｼ	やや少 **やや多** 並 **やや多** 並 やや少 並	ｶﾝｻﾞﾜﾊﾀﾞﾆは、低密度での防除に努めるとともに、薬剤感受性の低下を避けるため、系統の異なる薬剤をﾛｰﾃｰｼｮﾝで使用します。 ﾁｬﾉﾎｿｶﾞは例年9月以降に増加し、また、この時期は秋芽の伸長期であるので、今後の発生に注意します。 ﾁｬﾉｷｲﾛｱｻﾞﾐｳﾏのこの時期の発生は、卵・幼虫・蛹・成虫が混在し、卵と蛹には農薬がかかりにくく防除が困難です。秋芽の1～2葉期の被害防止に防除の重点をおき、多発時には5～7日間隔で、2回の薬剤散布が必要です。

１）「発生量」は、過去10年間の発生量と比較して、今後の発生量がどの程度になるか予測したものです。
２）※※は注意報、※は防除情報を発表中です。詳しくはホームページをご覧ください。病害虫防除・肥料検査センターホームページアドレスは、http://www.jppn.ne.jp/miyazakiです。